



IBM トレンド ②

イノベーションの創出を支援する 新時代のアプリ開発コンテスト 「IBM Bluemix Challenge 2015」がもたらす価値

新しい開発スタイルをもたらすと期待される「IBM Bluemix」(以下、Bluemix)を利用して開発したアプリケーション/サービスを対象とする開発コンテスト「IBM Bluemix Challenge 2015」が開催されました。2回目となる今回は、新たに学生部門のほか、Watson賞、IoT賞、サービスメガ盛り賞などを設け、一般部門と学生部門合わせて昨年の倍以上の500組を超える応募がありました。Bluemix Challenge開催の意義と今後の方向性について、クラウド事業統括 エコシステム・デベロップメントの2人に話を聞きました。



日本アイ・ビー・エム株式会社
クラウド事業統括
エコシステム・デベロップメント

坂井 彰
Akira Sakai



日本アイ・ビー・エム株式会社
クラウド事業統括
エコシステム・デベロップメント
アドバイザーIT スペシャリスト

森住 祐介
Yusuke Morizumi

新しいやり方で 新しいモノを生み出す力を育てる

——IBM Bluemix Challengeは、どのような経緯で開催されることになったのでしょうか？

坂井 IBMが提供するPaaS型のアプリケーション開発プラットフォームであるIBM Bluemix(以下、Bluemix)は、IBMがこれまで手掛けてきた企業向けのプラットフォームとは少し毛色が異なります。それは、企業だけではなく、個人も楽しみながら利用できる開発プラットフォームであるということです。そのため、昨年のBluemix Challengeは、主に個人の方々を対象にBluemixの魅力を広めていくことを目指して開催しました。——今年の応募者も個人が中心だったのでしょうか？

坂井 もちろん個人の方々も対象としていますが、今年は、企業でビジネスに関わっているの方々にも参加していただくように呼びかけを行いました。

その理由は、昨年の後半から、企業の間で技術とアイデアを競い合う開発イベントとして一般化しつつあるハッカソンを、ビジネスはもちろん人材開発や教育のために

「IBM Bluemix Challenge 2015」受賞者

■一般部門 最優秀賞

アプリ名 **またたび** — 対話型旅行プラン提案bot —
受賞チーム **CTC Cloud Club**

チャット画面から、旅行に行きたい日時と予算、人数を伝えるだけで、旅行全体のプランを一括提案してくれるアプリ。サーバーサイドJavaScript実行環境のNode.jsを中心に、チャットなどのデータ管理にMongoLab、メール配信にSendGrid、画像表示にOpenStack Swift、質問応答にWatson QA(英語版)などを利用している。

【受賞者コメント】

私はBluemixユーザーグループのコミュニティー・マネージャーを務めており、Bluemixを広める立場から本格的なアプリケーションを実際に開発してみようと応募しました。社内で開発チームを結成し、アイデアソンでアイデアを決定。約1カ月半で開発を行いました。今回は旅行データを持たせていますが、医療などさまざまな分野に応用することが可能です。
(CTC Cloud Club 原田 一樹氏)



■学生部門 ファイナリスト

学生部門では、100を超える応募チームの中から、ファイナリスト3チームと特別賞が選ばれました。ファイナリストは米国ニューヨークのWatson研究所へのツアーに招待され、そこでの最終プレゼンテーションによって最優秀賞が決定されます。

アプリ名 **Senrigan**
受賞者 **河口 綾摩**

車載カメラの情報をライブ配信とともに記録。見たい場所の映像を共有できる。



アプリ名 **Bump Hunter**
受賞チーム **Millet Way**

モバイル・デバイスで道路の凹凸などを検知し可視化するサービス。



アプリ名 **俺の一日**
～濡れない、焼けない、遅刻しない～
受賞チーム **ドブネズミ**

日照りや雨を避ける移動ルートをカレンダーから自動的にナビゲートする。



開催する動きが活発化してきたこと。また、Bluemixに関して、企業の方々に本格的に利用していただける環境が整ってきたと考えたからです。

実際に今年は、システム・インテグレーターやソフト開発会社などに所属する方々にも多数参加していただき、全体で昨年よりも倍以上の応募者を集めることができました。

——今年のBluemix Challengeのテーマにはどのようなコンセプトが込められているのですか？

坂井 今年は、「A New Way」をテーマとして掲げました。これには、「新しいやり方で新しいモノを生み出していこう」というコンセプトが込められています。こうしたテーマを設定した背景には、アプリケーション開発のモデルが大きく変化してきているという現状があります。

これまででは、数カ月、半年という長い期間をかけて要件を定義し、構築を進め、テストを行って、稼働させるというモデルが主流でしたが、Bluemixなどの最新のクラウドを活用するスタートアップ企業の間では、企画・構築・計測・修正のサイクルを繰り返しながら短期間で事業化を進める、「リーン・スタートアップ」のような新しい手法が主流になりつつあります。そうした手法を実際に体験いただくことも今年のBluemix Challengeの狙いでした。

若い参加者から新たな発想やアイデアが続出

——今年の参加者の傾向について教えてください。

森住 受賞者の顔ぶれを見ると分かりますが、今年は若い方の応募が多かったですね。Bluemixは、ちょっとしたコーディングだけで新しいアプリケーションを作り出すことができるNode-REDなどのサービスを備えており、若い人の柔軟な発想を存分に引き出すことができたと考えています。また、企業に活動の基盤を置く若いチームにも数多く参加していただきました。

——今年の応募作品にはどのような特徴がありましたか？

森住 今年の応募作品で特徴的だったのは、「IBM Watson」のコグニティブ・サービスを積極的に活用しようとするチームが多かったことです。作品の中には、Watsonにこんな使い方があったのかと驚かされるものもあって、さまざまなユニークな発想やアイデアが生み出されるコンテストの重要性を改めて再認識することができました。

もう一つ特徴的だったのが、「Raspberry Pi」や「Edison」を搭載したIoT機器との連携を実現したチームが多かったことです。これは、Bluemix上でハードウェアとソフトウェアを融合した新たなサービスが提供されることを予感させるものでした。

——Watson以外にはどのようなサービスが利用されていましたか？

森住 例えば、自分で電話が作れるクラウド電話APIであるTwilioサービスをいち早く取り入れたり、データベース・サービスを組み合わせたり、中には、他社

「IBM Bluemix Challenge 2015」審査を終えて

【審査委員長】小池 裕幸

日本アイ・ビー・エム株式会社
執行役員クラウド事業統括担当



IBM Bluemix Challengeは、「APIエコノミー」の世界を定着させることを目的に、昨年から開催しているコンテストです。今年の応募作品の特徴は、複数のAPIを組み合わせて、高度なアプリを構築すると同時に、優れたユーザー・インターフェースを備えた作品が多かったことです。これは、コンポーザブルな環境を提供し迅速にアイデアを実現できるBluemixの開発スタイルに合致するものだと感じています。

小岩井 裕氏

伊藤忠テクノソリューションズ株式会社
クラウド・セキュリティ事業推進本部 クラウドイノベーションセンター



実際に応募作品を審査して感じたのは、応募者の皆さんが、WatsonなどのたくさんのAPIの機能をきちんと理解した上で、それらを巧みに組み合わせることによって、今まで実現できなかった新しい価値を実際に生み出しているということです。Slerの立場から見ても、今後、さまざま領域で、サービス主体のビジネスが本格的に展開されるようになると感じることができました。

杉田 由美子氏

株式会社日立製作所
研究開発グループ 情報通信イノベーションセンター 兼 OSSテクノロジーラボラトリー



一般の利用者にすぐに使ってもらえるほど完成度が高い作品が多かったですね。また、これまで構築を諦めていたようなサービスも、Bluemixの豊富なAPIを利用することで容易に実現できていると感じました。このことは、IoT機器との連携やデータ資産の活用など、新しいさまざまなアイデアをすぐに追加して拡張できるようになったということだと思います。

新野 淳一氏

Publickey編集長



昨年に比べて利用できるAPIが増加したことを受けて、作品の幅が大幅に広がりましたね。当然、アイデアの幅が広がっていますが、特に人間が操作するユーザー・インターフェースの完成度が飛躍的に高まりました。もう一つの特徴は、IoTデバイスとの連携を実現した作品が多く見られたことです。こうした傾向は、今後もさらに加速していくのではないかと見ています。

クラウドのAPIやジョルダンの乗り換えAPIなどの外部APIを組み合わせて利用したチームもありました。これも、Bluemixと他の環境との連携という意味で興味深い試みと言えるでしょう。

学生部門の開催で見てきた新たな可能性

——今年から学生部門が新設されましたね。

坂井 昨年は、学生の皆さんも含めて広く参加者を募集し、審査もいっしょに行いましたが、今年は学生部門を別枠で設け、100組を超えるチームに応募していただきました。学生部門のテーマは「つながる車 (Connected car)」で、モビリティに焦点を当てました。このテーマは、ドイツの自動車業界が行っているハッカソンの取り組みなどを参考に決定したものです。

森住 ドイツでは、自動車業界がAPIやデータを公開して、それを活用するハッカソンが活発に行われています。今後は日本においても、さまざま業界がオープンAPIやオープンデータを公開し、Bluemixのような開発プラットフォームを使ってサービスとして組み立てる時代がやってくると考え、学生部門のテーマに設定することにしたのです。

坂井 実際に、企業においては、オープンデータを提供するだけでなく、自社が収集・加工したさまざまなビッグデータをBluemix上に提供するビジネスも可能になりつつあります。このようにして提供されるオープンデータやビッグデータをBluemix上で組み合わせ

て利用することで、さまざまな業界に対応した多様なサービスを提供できる可能性が広がっています。

企業や地域にイノベーションをもたらすイベントに

——IBM Bluemix Challengeの今後の方向性についてお聞かせください。

坂井 来年開催するかどうかはまだ決まったわけではありませんが、今年よりも大きな枠組みで開催することができれば、可能性はさらに広がるのではないかと思います。

先ほどドイツで多くの自動車会社がAPIやデータを提供していると紹介しましたが、例えば、さまざまな業界の企業や団体と共同で開催したり、よりグローバルに展開したりすることも十分に考えられます。

森住 企業だけではなく、今後は地域の経済を底上げしたいと考える地方自治体も巻き込んだ新しいサービスが生まれてくると考えています。Bluemix Challengeはそうしたニーズに対応するサービスの構築を支援する役割も果たすべきだと思います。

坂井 そうですね、さまざまな業界や団体、企業を巻き込みながらBluemixを使って新しいビジネスにつながるアイデアを生み出す場として広がっていければと思います。実際に、昨年のコンテスト受賞作品をビジネスに使用したいというオファーが来たりもしています。Bluemix Challengeを、こうしたイノベーションの創出を支援する役割を担うコンテストにしていきたいと考えています。